

栗花落〈つゆ〉の井戸（兵庫区山田町原野）

奈良時代の末、淳仁（じゅんにん）天皇のとき、丹生山田（にうやまだ）生まれの山田左衛門尉真勝（さえものじょうさねかつ）という人が朝廷（ちょうてい）に仕えていました。ある日、真勝は左大臣藤原豊成（さだいじんふじわらのとよなり）の二女白滝姫（しらたきひめ）の姿を一目みて、たちまち姫が好きになってしまいました。豊成には長女として中将姫（ちゅうじょうひめ）という娘があり、中将姫と白滝姫とは賢（かしこ）さと美しさで、都の噂（うわさ）の人でした。思いこんだ真勝は、心のうちを歌にして姫におくりました。

水無月（みなづき）の稲葉（いなば）の末もこがれるに 山田に落ちよ白滝の水

（稲の葉の端（はし）つぼのような身分の低い私のようなものでも、姫の姿を一目みて恋におちいてしまいました。どうか私の思いをおきとどけてください。）

この歌に対して、白滝姫は次のような歌を返しました。

雲だにもかからぬ峰の白滝を さのみぞ恋ひな山田男の子よ

（雲ですらかからないような身分の高いこの白滝姫に、どうしてあなたのような身分の低いものが恋いしたうのですか。）

真勝はまじめな人でしたので、天皇はその人がらにつね日ごろから感心しておられました。この二人の歌のやりとりをお知りになった天皇は、なんとかして真勝の思いをとげさせてやろうと、自（みづか）らその仲立ちに立たれました。そして、白滝姫を説得（せっとく）してこの二人を夫婦になさいました。真勝は喜び勇んで白滝姫を山田の里へつれ帰りました。

白滝姫は都の高貴（こうき）な生活から一度に田舎のひなびた土地にきたために、生活になじめず心のうかぬ日がつづきました。そうしているうちに一人の男の子が生まれました。しかし、白滝姫の気持ちはわかりませんでした。三年の歳月（さいげつ）がたち、白滝姫は病（やまい）のためにとうとうなくなっていました。

真勝は悲しみにくれました。姫の霊（れい）をなぐさめようと、屋敷の内に姫をまつる弁財天（べんざいてん）の社（やしろ）を建てました。この社の前に池を掘りましたが、この池に毎年の梅雨（つゆ）の季節には清水がわき出て、日でりのときでも潤（か）れることがありませんでした。

村の人びとは、この清水によってうるおいました。これは白滝姫の霊威（れいゐ）によるものだとして、人びとは、この清水を「栗花落（つゆ）の井戸」とよび、白滝姫をしのびました。栗の花が落ちる季節が梅雨なので、「栗花落」で「つゆ」とよませたといひます。

